

第4節 史跡の発掘調査と整備状況

1. 発掘調査

史跡甲府城跡の発掘調査は、平成2年度から舞鶴城公園整備事業に伴い始められた。事業終了後（平成16年度）も、様々な整備事業、復元事業に伴って発掘調査（試掘調査・立会調査含む）が行われてきたが、県庁舎やJR甲府駅周辺の史跡指定地外、武家地や町人地が広がる甲府城下町遺跡においても、様々な開発行為に伴い発掘調査を実施してきた経過がある。史跡内の調査者は県教育委員会が主体となって行ってきたが、史跡指定地外ではそれに加え、甲府市教育委員会も実施している。ここでは、発掘調査の成果について詳細に述べることとする。 ※以下〈 〉内は、発掘調査一覧表のNo。

(1) 天守台

【概要】

- ・天守台は、東面、北西面、南西面、南面、北面の各石垣及び穴蔵、階段、門礎石で構成されている。
- ・天守台石垣の東面、南西面、南面、北面の各石垣築石部及び隅角部の配石、勾配は築城期の石垣形状が安定的に残存している。
- ・北西面石垣及び穴蔵で、整備により旧状に復された石垣、石段がある。

【調査成果】

平成4年（1992）～平成6年（1994）〈No.1〉の3次にわたり全面調査を行った。上面を北西側から時計回りに5区に分け、1区より5区の順に調査し、その後穴蔵部分を調査した。

【出土遺物】

天端より金箔大型鯨瓦（鱗）が出土した。

【検出遺構】

調査の結果、北側より礎石1（1石）、東側より礎石2（3石）が検出されたが、近・現代の鉄塔、四阿、防空監視施設等による攪乱が著しかった。

礎石

礎石1は、古い矢穴を有する方形の礎石であるが、調査により原位置ではないと判断できる。したがって、建物との関連については判断ができない。礎石2は四阿跡より検出された。江戸期の堀、または明治時代の四阿の礎石と考えられる。

穴蔵

本丸から続く石段の上部に位置し、穴蔵への入口にあたる。楽只堂年録には門が描かれていることから、当該施設の礎石と考えられる。規模は約46cm四方で、直径9.5cmのダボ穴が開く。解体調査に伴い一時的に移動したが、原位置に再配置した。



天守台礎石

(2) 本丸

【概要】

- ・北東部の本丸櫓跡及び櫓台石垣の一部が確認されている。
- ・本丸南側では鉄門の、本丸西側では銅門の関連遺構が確認されている。

- ・鉄門、銅門の礎石には門構造に係る門扉軸穴などの痕跡及び鉄門袖石垣の櫓門梁受け痕跡が確認されている。
- ・鉄門南側の階段の下には、発掘調査で検出された築城期の石段が埋設保存されている。
- ・本丸全域には、築城期に石垣石材を切り出した石切場遺構が埋設保存されている。
- ・本丸南面の東西方向の石垣は築城時の形状を良好に留めており、天守台南面石垣と併せ標高 295m、総延長 80mに及んでいる。

【調査成果】

平成 2 年（1990）～平成 6 年（1994）〈No.1〉、平成 8 年（1996）～平成 12 年（2000）〈No.1〉、平成 22 年（2010）〈No.5〉にわたり調査を行った。

【出土遺物】

天守台下の瓦溜からは金箔鯨瓦（ほぼ全体の部位）や違い鷹の羽紋の飾り瓦などの、築城期の瓦が多く出土した。本丸が占める築城期の瓦の総量は全体量の約三分の一にあたり、その中でも浅野期以前の瓦の量は全体量の半数が集中する傾向にある。鯨瓦の分布では約 4 割が本丸に集中している。大型の鯨瓦の分布が集中していることから天守閣があった可能性が考えられる根拠の一つとなっている。建物の折れ部に使用される古手の滴水瓦も発見されている。石垣の裏栗層からは石臼や五輪塔など、中世の（甲府城築城以前の）石造物が多く出土しており、旧一蓮寺に由来するものや寺内町を構成する石工職人との関連性が窺われる。城域から発見された総数の 5 分の 1 が本曲輪から発見されている。

【検出遺構】

調査の結果、暗渠 4 ヶ所、石切場、石溜、石段、水路、礎石（鉄門）、水路、礎石（銅門）、瓦溜 6 ヶ所、階段及び礎石、地中石垣 5 ヶ所が検出された。

暗 渠

暗渠 1 は、平成 5 年（1993）、本丸北腰石垣改修工事の際に検出された。検出された遺構部分は底部幅約 0.5m、深さ 0.8m、長さ 6.7m を測る。暗渠 2 は、平成 8 年（1996）、本丸北腰石垣東側改修工事の際に検出された。底部幅約 0.3m、深さ 0.4m、長さ 5.6m を測る。暗渠 3 は、平成 4 年（1992）の本丸南腰石垣の改修工事の際に検出された。幅約 0.5m、深さ 0.5m、長さ 5.8m を測り、平均勾配は 3.5 度である。暗渠 4 は、平成 4（1992）、暗渠 3 の西側 30m の位置にあり、石垣解体時に検出されたもので、入口付近は検出されなかった。横幅約 0.5m、長さ 4.2m、平均勾配 5 度の暗渠である。

石切場

石切場 1～4 は、平成 6 年（1994）・8 年（1996）・10 年（1998）の調査により本丸中央部から検出された。築城期に石を採取したのが最後と推察される。



石切場

石 溜

平成 5 年（1993）の調査により、本丸北西部から検出された。

鉄門（石段・水路・礎石）

鉄門は本丸南西にある櫓門で、桁行 7 間半、梁行 2 間半を測る。天守曲輪と本丸の境にあたる門で、明治初年まで存在した。平成 5 年（1993）の調査以前に支柱の礎石 3 個、控え柱の礎石 2 個が露出していた。平成 5 年（1993）・平成 12 年（2000）の調査により控え柱の礎

石 5 個、水路が検出された。平成 22 年（2010）に鉄門復元整備事業に伴う再発掘調査を行い、礎石を活かして鉄門を復元整備している。また平成 9 年（1997）の調査で確認された築城期の石段は埋設保存されている。

銅門（水路・礎石）

銅門は本丸西側に位置する櫓門で、桁行 5 間半、梁行 2 間半を測る。本丸と二の丸の境にあたる櫓門である。平成 5 年の調査以前に支柱の礎石 3 個、控え柱の礎石 4 個が露出していた。調査により、控え柱礎石 1 個、石組み水路が検出された。平成 6 年（1994）、謝恩碑周辺の石垣改修に伴い、銅門南石垣を解体した際、享保 12 年（1727）の火災を受けた焼土と礎石 1 個が検出された。その後本丸園路整備工事に伴い、断続的に調査が行われ、遺構は復元展示されている。



鉄門石段



銅門水路

瓦溜

平成 4 年（1992）の調査で北腰石垣下より、瓦溜 2 ヶ所を検出。平成 8 年（1996）本丸中央部の調査で、瓦溜 3 ヶ所を検出。平成 11 年（1999）の天守台下調査で、瓦溜 1 ヶ所を検出。金箔鯨瓦、鬼瓦など多数出土。

階段及び礎石

平成 9 年（1997）の石垣解体調査において、本丸櫓推定位置西側の腰石垣の石段両脇で礎石 2 個が検出された。

地中石垣

平成 5 年（1993）の本丸北西部の調査で、地表面から約 30 cm 掘削した位置から、南北方向に地中石垣 3 ヶ所、腰石垣根石ラインに沿って、東西方向に 1 ヶ所、東側に南北方向で 1 ヶ所が検出された。検出された溝部分は東西方向が 5 m を測り、その他は全長 10 m を測る。



本丸櫓推定位置西側の石段と礎石

（3）天守曲輪

【概要】

- ・天守曲輪南側の東西石垣の内法には、地中石垣が埋設保存されている。
- ・天守台および本丸の東、南、北の段下を構成する帯状に囲う曲輪形状である。
- ・石垣の多くは明治時代以降の改変をうけているが、標高 287m 総延長 140m の石垣で構成される
- ・南側景観は本丸石垣と併せみられる階層状の石垣景観である。
- ・中の門等埋設保存されている遺構がある。

【調査経過】

平成 3 年（1990）～平成 9 年（1997）〈No.1〉に渡り、断続的に調査をおこなった。

【出土遺物】

鉄門南側からは大型鯨瓦の胸鱗の部位がまとまって発見されている。石垣の裏栗層からは石臼や五輪塔など、中世（甲府城築城以前）の石造物が多く出土した。城域では2番目に多い量である。

【検出遺構】

調査の結果、井戸、石段、中の門の石段・水路・礎石の抜かれた跡、瓦溜2ヶ所、地中石垣12ヶ所が検出された。

井戸

平成7年（1995）に、南西部の売店のあった位置より検出された。石垣改修時に検出されたもので、曲輪面より6m下がったところに位置していた。規模は上部の内径約1.6m、深さ9.5mであり、絵図にも描かれている井戸である。

石段

平成2年（1990）に曲輪南東部より、石段2段が検出された。天守曲輪北東より南部の境にあたる部分で、絵図にも描かれているが、検出された石段は江戸末期から明治以降のものと考えられる。

中の門（石段・水路・石列・礎石の抜かれた跡）

平成8年（1996）に石段跡、礎石を抜かれた跡が検出され、同9年（1997）に石列が検出された。また中の門北側より瓦溜が検出された。

地中石垣

平成6年（1994）・9年（1997）の調査により、天守曲輪南側の石垣に対して垂直（南北）方向に5基が検出された。また、石垣に沿うような形で6基の石垣が検出された。その他に小規模な石垣が検出されている。南北方向の石垣は、4ヶ所で南端は腰石垣に接していて間隔は約4mである。その他の石垣は腰石垣の地中より検出され、高さ2～3mを測り、勾配、面を有する石垣である。これは、盛土と裏栗石の境界に構築されたもので、石垣の背面にはほぼ平行していることから裏石垣とも呼称する。



地下石垣

（4）帯曲輪

【概要】

- ・城内の狭小曲輪である。
- ・本丸の西、南西の段下を帯状に囲う曲輪形状である。

【調査経過】

平成7年（1995）・平成8年（1996）〈No.1〉に銅門西下・鉄門階段西部分の調査をおこなった。

【出土遺物】

大型鯨瓦（鱗部分）・瓦（築城期の瓦は皆無）

【検出遺構】

トレンチ調査により石段跡ならびに柱穴を確認した。

柱 穴

発掘調査で近代の安山岩による石段を撤去後、南から北へ下る9段の段差を確認したが、石段は検出されなかった。銅門の北側下では、柵門のものと推測される柱穴2基を検出した。

瓦 溜

平成7年(1995)に柵門西より検出された。

(5) 人質曲輪

【概要】

平成2年(1990)～平成3年(1991)〈No.1〉、平成10年(1998)〈No.1〉に全面調査をおこなった。

【出土遺物】

下層部から築城期の多数の瓦中かから五三の桐紋の鬼板瓦や金箔鯨瓦が出土した。鬼瓦の表現方法には姫路城や大坂城出土の桐紋瓦と共通しており、豊臣秀吉が直接関わった城から発見される特徴があることから、甲府城の立ち位置が推察される資料である。鯨瓦と金箔瓦の出土量は、本丸に次いで多い地点である。大型鯨瓦の部位を含め、残存率の高い小型の金箔鯨瓦の存在は注目される。

【検出遺構】

調査の結果、瓦溜が検出された。

瓦 溜

曲輪全体が明治時代以降の瓦層の様相を呈しており、この瓦層のさらに下層から金箔瓦を混入する古い瓦層が確認された。

(6) 二の丸

【概要】

- ・現在残る西端の曲輪で、西面石垣、南面石垣が東面石垣の一部が築城時の石垣形状を良好に留めている。
- ・東側石垣の一部は江戸時代初期の様相を残し、数少ない指標となる石垣である。
- ・西面石垣の南側は、昭和初期の鉄道建設により取り壊されているが、技術差のない野面積み石垣による改修の痕跡が見られる。
- ・東面石垣の内側は一部崩落しているが、築城期の石段が残存している。
- ・坂下門の礎石、地業が埋設保存されている。

【調査経過】

平成5年(1993)～平成10年(1998)〈No.1〉、平成19年(2007)〈No.4〉、平成24年(2012)〈No.58〉、平成26年(2014)〈No.69〉、平成27年(2015)〈No.70〉、令和元年(2019)〈No.13〉にわたり、断続的に調査をおこなった。

【出土遺物】

築城期の瓦は僅かであるが発見されている。

石垣からは石臼や双体道祖神、墓石類など、中世(甲府城築城以前)の石造物が発見されている。

【検出遺構】

発掘調査の結果、瓦溜2ヶ所、石列、礎石・柱穴（内松陰門・山の井門）が検出された。

瓦 溜

瓦溜1は、平成5年（1993）の調査で中の門石段南側に検出された。瓦溜2は、平成7年（1995）の山の井門の発掘調査で検出された。

石 列

平成5年（1993）の調査で、中の門南側の石垣下部分より石列が検出された。石列は東西に並び、一辺が80cm～90cmの自然石だった。

坂下門（石段跡・石段・柱穴）

坂下門は甲府城跡の南西部に位置し、鍛冶曲輪から天守曲輪、二の丸へ通じる門である。平成6年（1994）・平成10年（1998）に調査をおこなった。西側にある礎石は調査前より露出していた。平成10年に門より南側を調査し、坂下門南側に石段跡、東に折れた鍛冶曲輪側に南北に石段が二列、柱穴群が検出された。なお、礎石は埋設保存されている。

礎石・柱穴（内松陰門・山の井門）

平成7年（1995）の内松陰門と山の井門の調査で内松陰門の礎石と礎石を抜いた穴が検出された。山の井門は内松陰門の南に位置し、二の丸への入り口にあたるが現存していない。山の井門の調査では、南側に柱穴が検出されたが、山の井門との関連を想定できるものではなかった。調査区の北側に南北に並ぶ石列が検出されたが、近代以降の石列であった。

柱 穴

平成5年（1993）中の門南側調査で柱穴が検出された。

暗 渠

平成19年（2014）の台所曲輪地点から確認された。

根石抜き取り跡（月見櫓）

平成26年（2014）の調査で石垣の痕跡と思われる落ち込みや、石垣脇に設置されたと考えられる水路を検出した。

（7）稲荷曲輪

【概要】

- ・曲輪の北面には、高さ13m、総延長100mの築城期の高石垣が残る。
- ・曲輪の東面には高さ約20mの石垣が、曲輪の北東には高さ約15mの石垣が見られるが、これらは築城期のものであり、出入隅構造となっている。
- ・曲輪北東石垣の内側には、技術差のない野面積み石垣による改修の痕跡と線刻画が見られる。
- ・曲輪北西部には、井戸・煙硝蔵遺構が埋設保存されている。
- ・曲輪東面石垣の内側では、建物礎石の遺構が露出展示されている。

【調査経過】

平成2年（1990）～平成4年（1992）〈No.1〉、平成6年（1994）～平成14年（2002）〈No.1〉、平成30年（2018）〈No.10〉、令和元年（2019）〈No.11・12〉に調査をおこなった。

【出土遺物】

瓦溜から、獅子留め蓋瓦や全国的にも類例の少ない風神を模した鬼瓦、違い鷹の羽紋の

鬼瓦が発見されている。築城期の瓦は本丸に次いで多い出土量を誇り、注目されるのは浅野期の瓦が多量に出土していることや本来リサイクルされるはずの釘が300本近く発見されていることから、ある時期に何かの目的で建物が意図して破壊されたことを示している。そのほか、住友銅吹所で見られるものと同様の棹鉛の出土も珍しく、煙硝蔵との関連性が窺われる存在である。過去に屋形曲輪でも同類のものが発見されている花菱の紋を用いた銅製の釘隠しなども発見されている。

この他、石垣に関連しては、甲府城の鬼門に位置する地点に関連することも想定されるが、改修時に多数の線刻された築石が178点確認されており、全体的に見ても集中している。

【検出遺構】

発掘調査の結果、暗渠2ヶ所、石段（天守曲輪門）、石段・柱穴（稲荷曲輪門）、井戸2基、稲荷社柱穴、煙硝蔵跡、階段石・柱穴（数寄屋勝手門）、瓦溜9ヶ所、礎石3ヶ所、柱穴4基、土坑が検出された。

暗 渠

暗渠1は、平成4年（1992）、稲荷曲輪南側、稲荷曲輪門東より検出された。幅約0.5m、高さ0.4m、長さ7mを測る。暗渠2は、平成9年（1997）の調査で、数寄屋勝手門東側の腰石垣より検出されたが、確認されたのは一部のみで、全体の規模は不明である。

石 段

平成14年（2002）の調査で、天守曲輪から稲荷曲輪に続くスロープ部分より検出された、天守曲輪門の石段である。幅約2.5m、長さ8.4mを測る。現在石段部分は埋設保存されている。



石 段

稲荷曲輪門（石段・柱穴）

平成2（1990）の調査で、稲荷曲輪門より石段2段とその南側に柱穴1基が検出された。

井 戸

井戸1は、平成10年（1998）の調査で、稲荷曲輪西部、番所跡周辺より検出された。規模は内径約1.8m、深さ6mを超える。石組み部分は4.5mで、そこからは地盤を掘り下げている。井戸2は、平成2年（1990）の調査で、天守曲輪北東石垣下部分より検出された。規模は約2.5m×3.6mの不正方形で、井戸というより水溜の性格が強いと考えられる。このほか、甲府城築城以前の井戸が5基確認されたており旧一蓮寺を取り巻く寺内町との関連が窺われる。

煙硝蔵

平成9年（1997）の調査で、稲荷曲輪北西部より検出された。規模は底部で東西約4.8m、南北4.2m、確認面からの深さ2.1mを測る、地下構造の施設である。底部床面には扁平の石材が敷かれている。

数寄屋勝手門（石段・柱穴）

平成9年（1997）の調査で、数寄屋勝手門に属すると考えられる石段と柱穴が検出された。

遺構は稲荷曲輪南腰石垣の復元改修工事の際に検出された。

瓦溜

瓦溜1は、平成9年（1997）の煙硝蔵周辺の調査により検出された。瓦溜2～4は、平成9年（1997）の北腰石垣下の調査により検出された。瓦溜5は、平成7年（1995）の調査により検出された。櫓台石垣改修のため、ストックヤードとなる予定地の調査であったが、近代遺構による攪乱のため、瓦溜1基の確認のみにとどまった。瓦溜6は、平成4年（1992）の南腰石垣改修に先駆けて調査がおこなわれた際に検出された。瓦溜7は、平成11年（1999）、機関車の撤去にともないおこなわれた調査の際に検出された。瓦溜8は、平成4年（1992）の調査により検出された。人質曲輪から本丸櫓の北下の広範囲にわたる瓦溜で、獅子留め蓋瓦や風神を模した鬼瓦などを含む瓦層を確認した。

稲荷櫓跡（礎石）

平成8年度（1996）の稲荷櫓台上面の調査により検出された礎石列で、稲荷櫓の礎石と考えられる。また礎石の下層より密教の法具である輪宝5点が出土した。

礎石

平成6年（1994）・平成8年（1996）の稲荷曲輪東腰石垣改修工事の際、検出された。櫓台南側から東腰石垣へ続く多門櫓の存在が指摘されたが、当時は絵図には認められなかったこともあり否定的だったが、近年の絵図の調査で建物が描かれているものがあり、多門櫓の存在が現実的になりつつある。

また、礎石3は東腰石垣の東面の合坂の上下に石列が露出された状態になっていた。東腰石垣に関しては、築城期の埋め殺された石垣や合坂、石段が検出されており、多門櫓の建設に伴い縄張りの変更がなされた可能性がある。

柱穴

平成9年（1997）の調査により1基検出された。煙硝蔵関連の遺構と考えられたが、攪乱が激しく、明確にするには至らなかった。また、平成10年（1998）の北腰石垣上面調査により、



柱穴



瓦溜



稲荷櫓跡礎石列



輪宝出土状況

塀の控え柱のものと思われる柱穴が2基検出された。平成10年(1998)の調査では、絵図に描かれた番所跡周辺を調査した。柱穴が数基検出されたが、番所に関わるものとの確認にはいたらなかった。

土 坑

平成9年(1997)の調査により検出されたが、時期などは不明である。

庄城稻荷社

平成2年(1990)の調査により検出された。一条小山の守護ともいわれていた当社は、戦災で城外に出される以前までであった。陶製のキツネが多数出土している。

(8) 数寄屋曲輪

【概要】

- ・複雑な形状を残す曲輪の形を呈する。
- ・曲輪の各面を構成するのは築城期の石垣である。
- ・曲輪南側には、櫓台石垣がある。
- ・石切場遺構・建物等関連遺構が埋設保存されている。

【調査経過】

発掘調査は平成3年(1991)～平成4年(1992)、平成9年(1997)、平成10年(1998)〈いずれもNo.1〉に調査をおこなった。

【出土遺物】

鉛製の錘が発見されている。普請に係わる工具の発見例はとても少ないので貴重な事例である。また、瓦当面に金箔が施された違い鷹の羽紋の軒丸瓦と違い鷹の羽紋の大型飾り瓦が発見されている。

【検出遺構】

発掘調査の結果、暗渠、石切場、瓦溜2ヶ所、礎石3ヶ所、柱穴、土坑2基が検出された。

暗 渠

平成9年(1997)の調査により検出された。検出された部分は幅約0.7m、長さ約3.5m、高低差1.2mを測る。北側のほぼ延長上の稲荷曲輪腰石垣にも暗渠が認められ、数寄屋曲輪の暗渠は石切り場の南側より検出され、鍛冶曲輪に面する石垣まで続いていると考えられる。

石切場

平成9年(1997)の調査により検出された。暗渠の北側にあたり、数寄屋勝手門の南側に位置する。矢穴、線刻画の入った石材が検出された。

瓦 溜

瓦溜1は、平成9年(1997)の調査により検出された。石切場と同位置にあたり、大型円形違い鷹の羽家紋飾り瓦が出土した。瓦溜2は、平成10年



石切場



瓦 溜

(1998) の調査により検出された。出土した瓦は築城期から江戸期のものまで幅広い。瓦溜 3 は、平成 3 年 (1991) の数寄屋曲輪西石垣改修工事ともなう調査により検出された。数寄屋曲輪と同様、直下の石垣下にも瓦が出土している。

礎石

礎石 1 は、平成 10 年 (1998) の調査により検出された。数寄屋曲輪北石垣の天端石より 4 尺、約 3 m 間隔で並んで検出され、位置関係より塀の柱の礎石と推測できる。礎石 2・3 は、平成 4 年 (1992) の調査で、数寄屋曲輪門石段上部の両脇より検出された。周辺は攪乱されている。

柱穴

平成 10 年 (1998) の調査により、直径平均 30 cm を測る柱穴が 9 基確認された。絵図には番所が描かれているが、番所関連の遺構であるかどうかは確認できない。



柱穴

土坑

平成 10 年 (1998) の調査により検出された。周辺は石切場、瓦溜で、焼土、炭化物が土坑を中心に分布している。かわらけ、獣骨が出土した。地鎮を施した遺構と推定されている。

(9) 鍛冶曲輪

【概要】

- ・南端に位置し、東西に長い曲輪形状である。
- ・曲輪北東部には、露出している石切場遺構がある。
- ・曲輪中央部には、米倉跡などの遺構群が埋設保存されている。

【調査経過】

平成 3 年 (1991) ～平成 7 年 (1995)、平成 10 年 (1998)、平成 11 年 (1999) (いずれも No. 1) に調査をおこなった。

【出土遺物】

築城期の瓦は非常に少ない。金箔鯨瓦が曲輪の西側から発見されている。

【検出遺構】

発掘調査の結果、暗渠 2 ヶ所、池状遺構・マウンド状土手・道状遺構、石切場、石組水路 2 ヶ所、石組水溜、井戸 3 基、井戸 4 基・柱穴、礎石、鍛冶曲輪門跡、坂下門遺構、瓦溜 5 ヶ所、米蔵基礎、柱穴群、胴木、土坑が検出された。

暗渠

暗渠 1・2 は、平成 3 年 (1991) の石垣解体工事により検出された。暗渠 1 は幅約 0.6 m、深さ 0.3 m、地表面より 4.1 m 下がった、海拔約 269 m の位置にある。暗渠 2 は幅約 0.6 m、深さ 0.4 m、地表面より 4.7 m 下がり、海拔は暗渠 1 と同じ、約 269 m である。

池状遺構・マウンド状土手・道状遺構

平成 5 年 (1993) の発掘調査により確認された。位置は鍛冶曲輪の西側、恩賜林記念館の東側で、整備前には花時計があった。表土より 30 cm 下面の調査区全体にコンクリート基礎

が検出され、遺構はその直下であった。北側は池あるいは湿地状で、その南側は土手状になっている。

石切場

鍛冶曲輪の北東部に位置し、岩盤が地表に現れている。周辺部を含む発掘調査では石切に関連する遺構は確認できなかったが、露頭に矢穴の存在を確認することができた。



石切場

石組水路

石組水路1は、平成5年(1993)の鍛冶曲輪西側の調査により検出された。幅約0.6m、深さ0.5m、検出された部分は長さ6.7mを測る。池状遺構より南に位置しており、堀へ流す機能をしていたと推測される。石組水路2は、平成6年(1994)の鍛冶曲輪中央部の調査により検出された。幅約0.3m、深さ0.4m、検出された部分は長さ3.5mを測る。

石組水溜

平成11年(1999)の鍛冶曲輪北西部の調査により検出された。東西約1.8m、南北0.8m、深さ平均0.6mを測る。絵図には記載されていない。

井戸

井戸1は、平成7年(1995)の鍛冶曲輪東部の調査により検出された。内径1.8m、井戸の周囲1~3mの範囲を栗石が囲む構造になっている。絵図にも描かれている井戸ではあるが、明治時代に使用されていたかどうかは不明である。深さ約3.5mまで掘り下げ、現在は埋設保存されている。井戸2は、平成6年(1994)の鍛冶曲輪中央部の調査により、表土面より0.7m下がった地点より検出された内径1.0m、深さ5mを測り、上部コンクリート蓋の撤去後、1mまでが石組、以下約2.0mは丸太材、その下部は地山の岩盤をくり貫いた構造になっている。井戸内より瓦・陶磁器片などが出土した。井戸の設置時期は幕末から明治期と推定される。井戸3は、平成3年(1991)の遊亀橋東側の堀北石垣改修工事の際、ノリ面を掘削した際に検出された。井戸は木枠部分が長軸1.3m、短軸1.2mの不整形で、検出された位置と遺物から、甲府城築城前の鎌倉時代末~室町時代に使用されていたと考えられる。



井戸と桶

また、平成11年(1999)に稲荷門東側で、未完掘の井戸を確認した。井戸は外径2.2mで、地盤を浅く掘り込んでいるのみで、現状からは実際に機能していたと考えることはできない。

石段

平成10年(1998)の稲荷門南側の調査で、地山まで下げた地点より検出された。石段は確認できなかったが、地山を階段状に掘削した痕跡が確認できた。

鍛冶曲輪門跡

鍛冶曲輪門は鍛冶曲輪の西端に位置し、楽屋曲輪と鍛冶曲輪の境にあたる門である。平成4年(1992)に調査をおこなった。礎石の抜かれた跡と石が検出されたが、門跡は公園内の建物へ供給されたガス管、水道管、電話線などの埋設物や、アスファルト舗装のための碎石

等により著しく攪乱を受けていた。

米蔵基礎

平成6年(1994)の調査により検出された。米蔵は『楽只堂年録』によると鍛冶曲輪の南側、現在の管理棟、遊亀橋の位置に東西に2棟が建てられていた。米蔵基礎は表土より1m下層に検出された。規模は東西約7m、南北約4mのL字型を呈し、5～10cm程度の礫群である。

礎石

平成4年(1992)に鍛冶曲輪南側より検出された。礎石間隔や規模が不明であり、描かれている絵図も発見されておらず、どのような建物であるか明らかでない。

柱穴

柱穴1は、平成10年(1998)の鍛冶曲輪東腰石垣天端より検出された。直径が平均約50cmの挿り鉢状で、塀の控え柱のものと考えられる。柱穴2は、平成7年(1995)の鍛冶曲輪東側の調査により検出された。調査箇所は「楽只堂年録」では米蔵と勘定所、明治以降は勸業試験場関連施設が建てられていた。

勘定所については、鍛冶曲輪中央の北東側に位置し、調査により6基の柱穴が検出されたが、付近には明治以降の建築物の柱穴が多数検出された。柱穴3は、平成5年(1993)の管理棟裏側の腰石垣天端調査により5基検出された。塀のものと推定され、中からは大量の瓦が出土した。

また、稲荷曲輪門の東側石垣に沿うように柱穴が5基確認された。機能・時期は不明であるが、位置関係から石垣を構築する際の設備に関連する可能性がある。

胴木

胴木は、平成3年(1991)の堀石垣解体調査の際、石垣の根石下より検出された。石垣に沿って、胴木の材質は主に松材であるが、橋の東側(安政の大地震で崩落したと伝わる石垣部分)部分からはクヌギ材が検出された。



胴木

土坑

平成6年(1994)の鍛冶曲輪門石垣天端調査の際に検出された。東側は堀石垣とつながり、南に直進して楽屋曲輪、山の手門へと通じる石垣であったが、現在は独立した形となっている。土坑は石垣南側に位置し、古銭と人骨が検出された。

(10) 清水曲輪

【概要】

- ・内城最北端に位置する曲輪。
- ・北東部には、内城への主要出入り口である山手門がある。
- ・山手門周辺や北西隅の清水櫓台やの石垣等は埋設保存されている。

【調査経過】

平成9年(1997)・平成10年(1998)〈No.17〉、平成15年(2002)〈No.24〉、平成17年(2005)～平成22年(2010)〈No.29, 33, 34, 37, 38, 39〉、平成26年(2014)〈No.66, 69〉、平成28年(2016)〈No.76〉に調査が行われた。

【出土遺物】

享保 12 年（1727）の大火により焼失した城内建物の被災瓦が出土した。

【検出遺構】

調査の結果、山手門へと通じる土橋、内堀に面する石垣、曲輪内の土塁、井戸、瓦溜等が検出された。

土 橋

平成 10 年度の甲府駅周辺新都市拠点整備事業および山手御門復元整備工事に伴う調査〈No.17〉により土橋東西面の石垣が検出された。東面石垣は攪乱が著しいが基底部長 4.3m、高さ約 1 m の野面積み石垣である。西面石垣は全長 12m、高さ約 4 m の規模を有し、南側約 4 m は野面積み石垣であるが、北側は布目積み等の積み直しがみられる。東西両面とも栗石層がみられるものの奥行きは 0.4～0.5m と薄い。

石 垣

平成 9・10・17 年度に実施された甲府駅周辺新都市拠点整備事業および山手御門復元整備工事に伴う調査〈No.17, 29〉により、山手門周辺の内堀に面する野面積み石垣が確認されている。また、平成 18 年度から平成 22 年度に実施された甲府駅周辺土地区画整理事業に伴う調査〈No.33, 34, 37〉では、清水櫓周辺の石垣が確認されている。大半が甲府城築城期の野面積み石垣であるが、清水櫓台以南では宝永 4 年（1707）の大地震後に積み直されたと考えられる石垣もみられる。このほか、清水曲輪南西部では、平成 15 年度（県庁構内公用車駐車場建設試掘調査）〈No.24〉、平成 18 年度（道路建設立会調査）〈No.203〉、平成 20 年度（ガス管敷設立会調査）〈No.18〉により内堀に面する石垣が検出されたほか、平成 26 年度の県庁舎耐震化等整備事業に伴う調査〈No.69〉により中仕切門脇の石垣を確認している。

土 塁

平成 19 年度から平成 22 年度に実施された甲府駅周辺土地区画整理事業に伴う調査〈No.33, 34, 37〉により曲輪内の土手が確認されている。

瓦 溜

平成 19 年度から平成 22 年度に実施された甲府駅周辺土地区画整理事業に伴う調査〈No.33, 34, 37〉により、土手法尻へ押し付けるように高さ約 1 m 積み上げられた状態で検出された。享保 12 年（1727）の大火により焼失した城内建物の被災瓦と考えられる。柳沢時代の城内建物に葺かれていた瓦が一括廃棄されたものであり、同時代性の高い一括資料となる。